

令和6年度(2024年度) 研究員派遣による学校支援に関する研究(読み解く力 国語科)

## 児童が主体となる小学校国語科の授業づくり

—児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、学びを実感することを通して—

### 内容の要約

本研究では、児童が主体となる小学校国語科の授業の実現を目指した。そのために、授業づくりにおいて、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を具体的に想定した。想定した児童の姿を実現するために、「読み解く力」の視点を踏まえた単元構想を基に、児童にとって魅力的な言語活動の設定や、交流のモデル動画の活用など指導の手立てを講じ、継続して授業改善に取り組んだ。その結果、児童は自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせながら、思いや考えを深める学習を積み重ね、学びを実感することができた。このことが、児童が主体となる小学校国語科の授業につながった。

### キーワード

児童が主体となる      言葉による見方・考え方      学びを実感する  
「読み解く力」の視点を踏まえた単元構想      自分の思いや考えを深める

目		次	
I	主題設定の理由	(1)	VI 研究の内容とその成果 (5)
II	研究の目標	(1)	1 児童が言葉に着目して考え、言葉への自覚を高めることができる授業の実際 (5)
III	研究の仮説	(1)	
IV	研究についての基本的な考え方	(2)	2 児童が自ら進んで学習に取り組む、学びを実感できる授業の実際 (8)
1	本研究における児童が主体となる小学校国語科の授業について	(2)	3 児童が主体となる小学校国語科の授業づくりを進めるための組織的な取組の実際 (11)
2	児童が主体となる小学校国語科の授業の実現に向けた取組	(3)	4 研究協力校の児童と指導者の変容 (11)
3	児童が主体となる小学校国語科の授業づくりを進めるための組織的な取組	(4)	VII 研究のまとめと今後の課題 (12)
4	研究成果の検証	(4)	1 研究のまとめ (12)
V	研究の進め方	(5)	2 今後の課題 (12)
1	研究の方法	(5)	文 献
2	研究の経過	(5)	

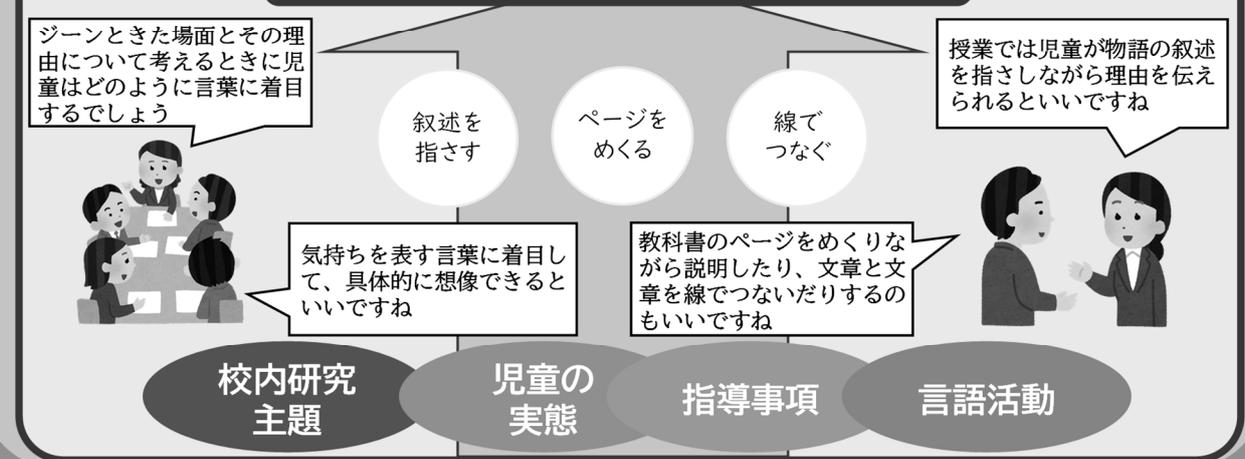
# 児童が主体となる小学校国語科の授業の実現

児童が学びを実感する

自分の思いや考えを深める学習を積み重ねる



自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を想定する



「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりを行う

各教科等で目指す資質・能力の育成

学びを実感

<p>自分なりに解決し、知識を再構築する</p> <p>① 再構築</p> <p>② 関係付けて整理する</p> <p>③ 必要情報を確かに取り出す</p>	<p>再構築</p> <p>関係付けて整理する</p> <p>必要情報を確かに取り出す</p>
--	---

目的意識

派遣研究協議会で学んだことを共有し、実践に生かす

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編より

「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること」

「第三期学力向上滋賀プラン」(滋賀県教育委員会 令和6年2月)

視点Ⅰ「子どもたちが主体の授業づくり」

◆「読み解く力」の視点を踏まえた、主体的・対話的で深い学びの実現



児童が主体となる小学校国語科の授業とは？

## 研究員派遣による学校支援に関する研究(読み解く力 国語科)

# 児童が主体となる小学校国語科の授業づくり

－児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、学びを実感することを通して－

## I 主 題 設 定 の 理 由

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編(以下、学習指導要領解説という。)では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に関する配慮事項として「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること」<sup>1)</sup>と示されている。

また、「第Ⅲ期学ぶ力向上滋賀プラン」(滋賀県教育委員会 令和6年2月)では、プランの主な取組の視点Ⅰとして「子どもたちが主体の授業づくり」が掲げられており、そのための重点的な取組の一つとして、「読み解く力」の視点を踏まえた、主体的・対話的で深い学びの実現を挙げている。

令和5年度研究員派遣による学校支援に関する研究(読み解く力 国語科)(以下、令和5年度研究という。)において、「読み解く力」の視点を踏まえた単元構想を基に授業を行う中で、児童が主体的に学習に取り組むための指導の手立てを講じたことにより、児童は学ぶことの楽しさや大切さ、価値に気付くことができるようになり、学びに向かう力の育成につながったという成果が見られた。一方、小学校国語科における主体的・対話的で深い学びを実現するために、児童が学びの必然性を実感し、自ら学習に取り組むことができるような指導の手立てを講じた授業を行うことについて課題が残った。

これらのことから、児童が主体となる小学校国語科の授業を実現するためには、主体的・対話的で深い学びを具現化し、授業改善に取り組む必要がある。特に、「読み解く力」の視点を踏まえ、児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、自分の思いや考えを深める学習を積み重ね、学びを実感できるような指導の手立てを講じることが重要であると考え。

そこで本研究では、令和5年度の研究成果を生かして、指導者は、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を具体的に想定し、「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりを行い、授業改善に取り組む。児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、自分の思いや考えを深める学習を積み重ね、学びを実感することで、児童が主体となる小学校国語科の授業を実現することができると考え、本主題を設定した。

## II 研 究 の 目 標

小学校国語科において、児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、自分の思いや考えを深める学習を積み重ね、学びを実感することを通して、児童が主体となる小学校国語科の授業の実現を目指す。

## III 研 究 の 仮 説

小学校国語科において、指導者は、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を具体的に想定する。想定した姿を目指し、「読み解く力」の視点を踏まえた国語科の授業づくりに取り組む。児童が「取り組んでみたい」「できるようになりたい」と感じる魅力的な言語活動を設定することや、

児童が考えを交流する場面で交流のモデル動画を効果的に活用することなど、具体的な指導の手立てを講じる。その中で、児童が自分の思いや考えを深める学習を積み重ね、学びを実感することで、児童が主体となる小学校国語科の授業を実現することができるだろう。

#### IV 研究についての基本的な考え方

##### 1 本研究における児童が主体となる小学校国語科の授業について

###### (1) 児童が主体となる小学校国語科の授業に向けて

学習指導要領解説では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるにあたり、深い学びの鍵となるのが言葉による見方・考え方であると示されている。また、本県では、「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりを充実することで、主体的・対話的で深い学びの実現を目指している。

本県が推進する「読み解く力」は、図1に示すように、「A主に文章や図、グラフから読み解き理解する力」と「B主に他者とのやりとりから読み解き理解する力」の二つの



図1 「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりのイメージ図

側面と、「①発見・蓄積」「②分析・整理」「③再構築」の三つのプロセスに整理されている。そして、「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりのポイントとして「第Ⅲ期学ぶ力向上滋賀プラン」では、子ども自身が必要な情報を分析したり整理したりできるような学習展開を計画すること、まとめや振り返りの時間を確保し、子ども自身が学んだことを自分の言葉で整理できるようにすることが示されている。これらのことから、本研究において「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりを行い、児童が学びを実感することが、主体的・対話的で深い学びとなり、児童が主体となる小学校国語科の授業を実現することにつながると考える。

###### (2) 言葉による見方・考え方を働かせるとは

学習指導要領解説では、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」<sup>1)</sup>と示されており、小学校国語科において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理し、それぞれの目標を図2のように位置付けている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。〔知識及び技能〕
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。〔思考力、判断力、表現力等〕
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。〔学びに向かう力、人間性等〕

学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編における国語科の目標を基に作成

図2 学習指導要領解説 国語編における国語科の目標(下線は筆者)

その中に記載されている言葉による見方・考え方を働かせるとは、「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる」<sup>1)</sup>と記されている。そこで、本研究では児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせることに重点を置く。指導者は児童が言葉に着目して考えることができる学習活動を意図的に取り入れ、児童が言葉への自覚を高めることができるようにすることで、児童は自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、思いや考えを深めることができるようになり、児童が主体となる小学校国語科の授業の実現につながると考える。

### (3) 児童が学びを実感するとは

本研究において、児童が学びを実感するということを「自らの学びを振り返り、分かったことやできたことを、次の学びや日常生活に生かすこと」と捉える。児童は、単元や1単位時間の学習を振り返り、「どうしたらできるようになるか」や「よりよくするためにはどうすればよいか」、また「友達の考えで使ってみたいこと」等について自らの学びを言語化する。児童が振り返りを蓄積し、自らを見つめ直すことで、成長や課題に気付き、その気付きを次時の学習や日常生活に生かすことができると考える。

## 2 児童が主体となる小学校国語科の授業の実現に向けた取組

### (1) 「読み解く力」の視点を踏まえた単元構想

本研究では、児童が主体となる授業の実現に向けて、令和4年度小学校国語科指導力向上プロジェクト研究の研究成果物である「国語科単元構想シート」を用い、「読み解く力」の視点を踏まえた単元構想を行う。指導者は「①発見・蓄積」「②分析・整理」「③再構築」の三つのプロセスにおいて、言葉に着目して考えることができる学習活動を意図的に取り入れる。そこで、「国語科単元構想シート」

国語科 単元構想シート		評価規準
単元目標	【知識及び技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】	
言語活動	<b>自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿</b>	
単元の流れ 評価の計画	「読み解く力」の視点を踏まえた児童の学びの姿	児童が主体となるための重点的な指導の手立て

図3 令和6年度版「国語科単元構想シート」

の中に、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を具体的に想定できるようにした(図3の枠囲み)。想定した児童の姿を手がかりに、指導者は単元や1単位時間の授業後、実際の児童の姿を基に単元の流れや指導の手立てについて省察し、授業改善につなげる。

このように、本研究において「読み解く力」の視点を踏まえ、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を具体的に想定しながら単元構想を行うことで、その姿を実現するための指導の手立てを見いだすことができると考える。

### (2) 児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、思いや考えを深めるための指導の手立て

#### ア 児童にとって魅力的な言語活動の設定

令和5年度研究では、単元を通して児童が主体的に学習に取り組むために、身近なことや経験したことなどから、児童が興味・関心をもち、学習の必然性を感じることができる魅力的な言語活動を設定している。本研究においても、児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、自分の思いや考えを深めることができるように、児童にとって魅力的な言語活動を設定する。その際、指導者は、児童が言語活動に取り組む姿を想像し、設定した言語活動が単元目標の達成につながっているか確認する。また児童が「取り組んでみたい」「できるようになりたい」と感じ、興味・関心をもつことができる言語活動になっているか見直す。児童と言語活動を共通理解する際は、指導者が作成する言語活動のモデルや課題を提示する中で、児童一人一人が目的意識や相手意識を明確にもつことができるようにする。

#### イ 児童が見通しをもつことができる学習計画

児童が見通しをもって学習に取り組むことができるように、指導者は、児童と共に学習のゴールに向け共通理解を図りながら学習計画を作成する。学習計画を作成する際には、学習の目的や学習のゴール、1単位時間の学習活動が分かるように、児童の言葉を活用するなど工夫する。完成した学習計画は教室内や1人1台端末上など常に児童が確認できる場所に掲載する。学習計画を指導者と児童で共有することで、児童が「今日は何をするのか」「次はどうしたらよいか」という見通しをもつことができるようになる。これらのことにより、学習の目的が明確になり、

児童は自ら学習を調整し、学習のゴールに向けて見通しをもって粘り強く取り組めるようになると考える。

#### ウ 児童が言葉に着目して考えることができる交流のモデル動画の活用

他者との交流において、児童が言葉に着目して考えることができるよう、交流のモデル動画を活用する。児童が交流のモデル動画を視聴することで、交流の目的を理解したり、どのように交流を行えばよいのか具体的に捉えたりすることができる。また、指導者が単元構想を行う際に交流のモデル動画を作成することで、児童が自律的に学びを進めるための緻密な手立ての構築につながる。交流のモデル動画は、交流の目的に応じて、交流相手の選び方や座席配置、質問の仕方、答え方等を意識して作成する。このような指導の手立てを講じることで、児童が目的をもって自ら交流相手を選択し、互いの考えを組み合わせ、よりよい考えを生み出すことにつながる可以考虑。

#### エ 児童が学びを実感することができる振り返り

単元のまとめや1単位時間の振り返りの際には、当センターの令和元年度研究員派遣による学校支援に関する研究(国語科)の研究成果物である「学びの足あとシート」(図4)を用いる。このシートは、単元の振り返りが1枚のシートにまとめられているため、児童が単元を通して振り返りを記録したり、読み返したりすることができる。また、振り返りを生かして、本時の課題を設定することも可能になる。このように児童は振り返りを蓄積して自らを見つめ直し、成長や課題に気づき、その後の学習や日常生活に生かすことができる。このことが、児童が学びを実感することにつながると考える。

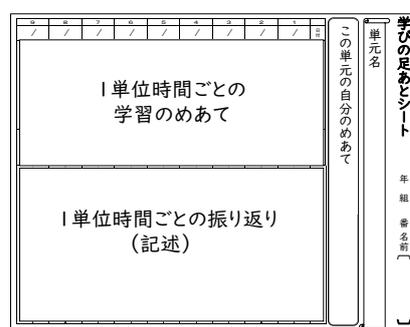


図4 「学びの足あとシート」

### 3 児童が主体となる小学校国語科の授業づくりを進めるための組織的な取組

研究員派遣による学校支援に関する研究は、研究員が、県内2校の研究協力校に週1回勤務する。このような授業支援等を通して、当センターの研究成果を広く提供・提案し、研究協力校の児童・生徒の確かな学力の向上や指導者の教科指導力向上に資するとともに、研究の実践的実証を行う。研究協力校において、研究員が教材研究や単元構想の段階から、指導者と協働して授業づくりを進め、単元や1単位時間の学習後は、児童の姿を基に省察を行う。また、本研究では研究員が橋渡し役となり、研究協力校同士をつなぐことを行う。研究協力校同士で他校の指導者の授業を参観することや、他校の指導者と授業についての情報交換をすることで、新たな授業づくりの視点を見いだすことが可能となり、児童が主体となる小学校国語科の授業づくりの推進・充実を図ることができると考える。

### 4 研究成果の検証

単元構想で想定した自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿が学習の中で見られたか、児童が学習を通して学びを実感することができたかなど、児童が主体となる小学校国語科の授業が実現できたかについて、授業中の児童の姿や学習に用いたワークシートの記述、学習成果物、児童へのインタビュー等から、児童一人一人の変容を見取り、研究成果の検証を行う。

また、研究始期と終期に研究協力校の児童と指導者を対象とした小学校国語科の授業等に関する質問紙調査を実施し、児童の学習に対する意識の変容を分析する。

## V 研究の進め方

### 1 研究の方法

- (1) 研究協力校の国語科における児童および指導者の質問紙調査や指導者との協議から、各校の実態や課題を把握し、本研究の目標に沿って学校支援の内容を設定する。
- (2) 研究協力校の実態や校内研究主題を踏まえ、研究協力校の指導者と共に、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を具体的に想定し、児童が学びを実感し、児童が主体となる授業づくりの実現を目指す。
- (3) 研究協力校において研究始期に派遣研究説明会を実施し、派遣研究の概要や、国語科の授業づくりについて説明を行い、校内研究との連携を図る。
- (4) 年間2回の派遣研究協議会を研究協力校の校内研究と連携して実施し、トータルアドバイザーからの指導や学年の取組について交流・協議等を行う。
- (5) 指導者との協議、児童の学びの姿や振り返りの記述、児童の学習に対する意識や、指導者の授業づくりに対する意識の変容等から、児童が学びを実感し、児童が主体となる小学校国語科の授業が実現できたか検証する。
- (6) 研究協力校での取組の内容、成果と課題についてまとめる。

### 2 研究の経過

4月 4月～11月	研究構想、研究推進計画の立案 派遣研究 (小学校2校、原則各校週1回派遣)	11月	児童・指導者質問紙調査(終期)の実施 と分析
5月 7月	派遣研究説明会 児童・指導者質問紙調査(始期)の実施 と分析	11月～12月 1月 2月 3月	第2回派遣研究協議会 研究論文原稿執筆 研究発表準備 研究発表大会 研究のまとめ
8月 夏季休業中	第1回派遣研究協議会 2学期に向けた授業づくり		

## VI 研究の内容とその成果

### 1 児童が言葉に着目して考え、言葉への自覚を高めることができる授業の実際

#### (1) Y校の実態と課題

Y校では、昨年度、国語科を中心とした校内研究に取り組み、ペア学習を効果的に取り入れることや学習課題を明確にすることで、児童が主体的に学ぶことができるという成果が見られた。一方で、児童が学びを実感できる「まとめ」や「振り返り」を充実することや、1人1台端末を効果的に活用することを課題と感じていた。

そこで、令和6年度の校内研究主題として「自らを表現し、周囲と豊かに関わり合える子の育成～『できた』『わかった』『深まった』を目指して～」を設定し、学校全体で取り組むこととして、学びを実感できる授業づくりを挙げた。

#### (2) 自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿の想定

Y校の指導者Aは、1学期の授業において、図5の「読み解く力」の視点を踏まえた単元構想を基に、実践を行った。

指導者Aはこれまでの授業を振り返り、児童の実態に合わせて言語活動を設定することや、児童に提示する言語活動のモデルを作成することに取り組みたいと考えていた。また、文学的な文章を読むときに内容の大体を捉えることから、登場人物の気持ちの変化について場面の様子に着目した

国語科単元構想シート		単元名「自分の選んだ好きな場面を紹介カードで図書室から全校に紹介しよう」 全8時間 教材名「まいごのかぎ (光村図書 3年上)」	
<b>単元目標</b> (単元で育成を目指す資質・能力)  ◎…指導の重点	○様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにする。 ◎登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。【思考力、判断力、表現力等】(C)(1)エ	<b>評価規準</b>	
		<b>知識・技能</b> 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにする。	<b>思考・判断・表現</b> 「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりや結び付けに具体的な想像している。
<b>言語活動</b>  自分が選んだ「不思議な出来事」が起こる本好きな場面を見つけて、「好きな場面紹介カード」にまとめて紹介する。	自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿 ・自分が好きな場面を選んだ理由について、教科書のページをめくりながら考え、着目した叙述をはっきりさせるために理由となるところに線を引いている。 ・自分が好きな場面を選んだ理由について、教科書のページをめくりながら、選んだ叙述が相手に分かるように叙述を指さしながら相手に伝えている。		
<b>単元の流れ</b>	「読み解く力」の視点を踏まえた、児童の学ぶ姿	指導の手立て ★児童が主体となるための重点的な手立て	
① 学習の見通しをもつ。 教材文の範読を聞き、好きな場面を中心に初発の感想を書く。 ② 初発の感想から学習計画を立てる。 自分の課題に合わせて読み、「まいごのかぎ」の設定やあらすじについて、確認する。 ③ 「まいごのかぎ」の好きな場面を選び、全文シートに自分が好きな場面が分かるようにする。 ④ 自分が選んだ「まいごのかぎ」の好きな場面を全文シートを使いながら交流する。 ★ ②～④で必要に応じて並行読書材を読み、好きな場面を見つける時間を取る。 ⑤ 好きな場面を選んだ理由を紹介カードに書き、教室内の友達と自由に交流する。 ⑥ 自分が選んだ本の好きな場面を選ぶ。 ⑦ 自分が選んだ本について好きな場面とその理由を紹介カードにまとめる。 ⑧ 紹介カードを読み合い、好きな場面とその理由を交流する。 図書室に掲示し、全校に向けて紹介する。	A 主に文章や図グラフから読み解く力	必要情報を確かに取り出す【①発見・蓄積】 教材文や並行読書材を読み、自分が好きだと思う場面や、不思議だと思う場面を見つけている。 友達との交流を通して自分が好きだと思う場面や、不思議だと思う場面を新たにみつめている。	★単元の導入で、言語活動のモデルを示すとともに、学習活動のゴールを伝えることで、目的意識や相手意識を明確にする。 ・指導者による読み聞かせや、朝読書の時間を活用し、並行読書の本に触れる機会を設ける。また、児童の読書履歴を一覧にした表を掲示し、児童全員の読書履歴が分かるようにする。 ・学習計画を掲示し、児童が必要に応じて学習の見通しをもったり振り返ったりすることができるようにする。 ★好きな場面に付箋を貼り、自分が心に残った場面について蓄積する。

図5 第3学年「読むこと(文学的な文章)」の「国語科単元構想シート」

り、場面の移り変わりや結び付けたりして具体的に想像することにつながりたいと感じていた。そこで、一人一人が言葉に着目して考えることができ、言葉への自覚を高めることにつながるよう、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を想定し、授業改善に取り組んだ。

本単元では、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像することを単元目標の重点とした(図5のA)。指導者Aは児童が登場人物の気持ちの変化をどの叙述から捉えたのかを具体的に伝えることができるよう、図5のBに示すように、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を想定した。その後、その姿を実現するために、図5のCに示すように指導の手立てを講じることにした。

児童が自分の選んだ本の好きな場面に付箋を貼り、自分が心に残った場面を蓄積するように指導の手立てを講じたことで、児童は本に貼られた付箋を手がかりに、自分の好きな場面を見つけることができた。しかし、児童aが指導者Aへ好きな場面とその理由を伝える際には、好きな場面を「このへん」と言いながら漠然と場面全体を示して伝えている姿が見られたことから、児童が登場人物の気持ちの変化をどの叙述と結び付けて捉えたのかを具体的に伝えることができず、言葉に着目して捉えたり、問い直したりするまでには至っていないことが分かった(図6)。

指導者Aはこの実践について、児童は自分が好きな場面を選んだ理由を言語化できず、考えの交流に至らなかったと振り返った。そして、交流する際に児童が言葉に着目して考えを伝え合うためには、質問の仕方や答え方を具体的に示す必要があったと考えた。このことから、2学期の実践では、交流する際、児童

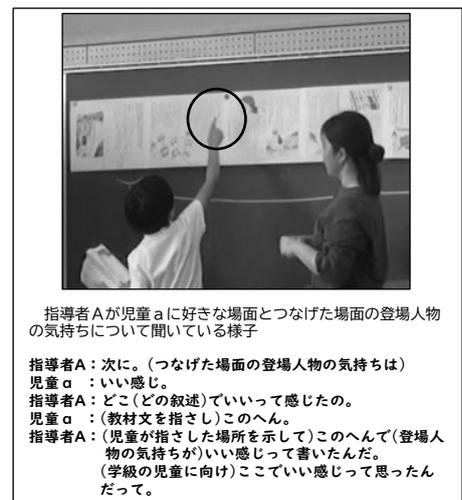


図6 児童aと指導者Aの発話の様子

が言葉に着目して考えることができる指導の手立てを講じることとした。

(3) 児童が言葉に着目して考えることができる交流のモデル動画の活用

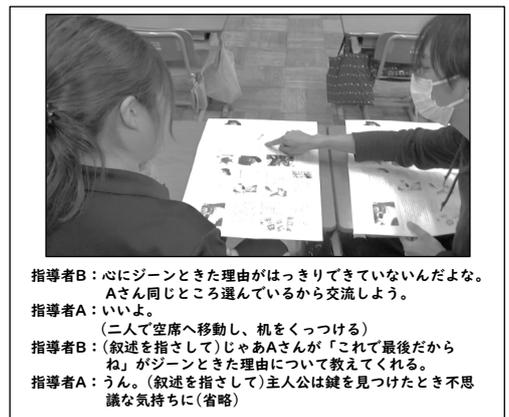
指導者Aは2学期の授業において、図7の「読み解く力」の視点を踏まえた単元構想を基に、実践を行った。

国語科単元構想シート		単元名「物語を読んで心にジーンときた場面を家族に伝えよう」 全10時間 教材名「ちいちゃんのかげおくり (光村図書 3年下)」	
<b>単元目標</b> (単元で育成を目指す資質・能力)  <b>◎…指導の重点</b>	○様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすることができる。【知識及び技能】、(C1)オ ○登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。【思考力、判断力、表現力等】(C1)エ ◎文章を読んで理解したことに基いて、感想や考えをもつことができる。【思考力、判断力、表現力等】、(C1)オ、イ ○言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。	<b>評価規準</b>	
		<b>知識・技能</b> 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにしている。(C1)オ	<b>思考・判断・表現</b> 「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。(C1)エ 「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基いて、感想や考えをもっている。(C1)オ
		<b>主体的に学習に取り組む態度</b> 進んで読書をし、文章を読んで理解したことに基いて、自分の感想や考えをもち、学習課題に沿って自分が選んだ心にジーンときた場面を伝えようとしている。	
<b>言語活動</b> 戦争と平和の物語を読み、自分が心にジーンときた場面とその理由についてカードにまとめ、家族に伝える。	自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿 ・自分が心にジーンときた場面とその理由を、教科書のページをめくりながら場面と場面を結び付けて考え、理由となるところに線を引いている。 ・自分が心にジーンときた場面とその理由を、教科書のページをめくりながら、着目した叙述が相手に分かるように叙述を指さしながら相手に伝えている。 ・自分が心にジーンときた場面とその理由が家族に伝わるように、物語の文章を使って紹介カードを書いている。		
<b>単元の流れ</b>	「読み解く力」の視点を踏まえた、児童の学ぶ姿		★児童が主体となるための重点的な手立て
・学校司書と連携し、教室内に戦争と平和読書コーナーを設置し、読み聞かせや、読書の機会を設ける。 ①指導者が作成した言語活動のモデルを提示しながら、指導者が心にジーンときた場面を児童に伝える。言語活動のモデルから学習の進め方を話し合い、学習計画を立てる。 ②「ちいちゃんのかげおくり」を読み、物語のあらすじや登場人物を確認する。初発の感想をノートに書く。 ③「ちいちゃんのかげおくり」の中で、心にジーンときた場面とその理由を見つけ、全文シートに線を引いたり、登場人物の気持ちを書き込んだりする。 ④「ちいちゃんのかげおくり」の中で心にジーンときた場面と、その理由について交流する。 ⑤カードに心にジーンときた場面と、その理由をまとめる。学習後の感想を書く。 ⑥～⑨自分の選んだ物語をカードにまとめるための学習計画を立て、学習を進める。 ⑩まとめたカードを使って、物語を読んで心にジーンときた場面を友達に伝える。	<b>A</b> 主に文章や図、グラフから読み解き理解する力	<b>B</b> 主に他者とのやりとりから読み解き理解する力	
	必要な情報を確かに取り出す【①発見・蓄積】 教材文や並行読書材を読み、自分が心にジーンときた場面を見つけている。	友達との交流を通して友達に心にジーンときた場面について理解している。	・戦争が起きた時代の物語を10冊程度選び、並行読書材として用意する。 ・単元の導入で、言語活動のモデルを示し、単元のゴールイメージを児童に伝えることで、目的意識を明確にする。 ★言語活動のモデルから「心にジーンときた理由」「感想」など、カードに書く内容が確認できるようにする。 ・教科書教材「ちいちゃんのかげおくり」の全文提示をし、内容の大体を捉えられるようにする。 ・指導者による読み聞かせや、朝読書の時間を活用し、並行読書材に触れる機会を設ける。また、学級全員の読書履歴が分かるようにする。 ・並行読書材を読み、心にジーンときた場面に付箋を貼っておき、自分が心にジーンときた場面について蓄積する。 ★児童が、考えをもつタイミングでペア交流を行い、考えを深めることや、よりよい考えをもつことができるようにする。 ・学習計画を提示し、児童が必要に応じて学習の見通しをもったり、振り返ったりすることができるようにする。 ★児童が交流を行う際のモデル動画を準備し、交流前に児童と確認したり、必要に応じて児童が見返したりすることができるようにする。
	情報を比較し、関連付けて整理する【②分析・整理】 物語を読んで心にジーンときた場面とその理由について、場面の移り変わりを基に考えをもつ。	物語を読んで心にジーンときた場面について場面の移り変わりを基に友達と交流することで、新しい考えに気付いている。	
	自分なりに解決し、知識を再構築する【③再構築】 物語を読んで心にジーンときた場面とその理由を明確にし、カードに書く。	友達と交流を通して、物語を読んで心にジーンときた場面とその理由を明確にしている。	

図7 第3学年「読むこと(文学的な文章)」の「国語科単元構想シート」

指導者Aは、第1回派遣研究協議会において、本研究のトータルアドバイザーより交流のモデル動画を活用することが、児童が言葉に着目して考えるために有効であると学んだ。また、本実践では、自分が心にジーンときた場面とその理由について、場面の移り変わりと結び付けることができるよう、図7のAに示すように、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を具体的に想定した。そして、この姿を踏まえ、交流のモデル動画を作成し、授業で視聴することにした。そうすることで、児童は心にジーンときた場面とその理由について、どの叙述から捉えたのが具体的に伝えようと、言葉に着目して考えることができるのではないかと考えた。

指導者Aは、指導者Bと協働で交流のモデル動画(図8)を作成する際、トータルアドバイザーからの「児童が単元目標である登場人物の気持ちの変化や性格、情景について場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像するためには、『交流の目的を明確にすること』『叙述を指さし、声に出して読むこと』を意識できる交流のモデル動画を作成する必要がある」という助言を参考にした。交流の際、1学期の交流では、漠然と場面全体を示していた児童aは、児童bと、互いのジーンときた場面とその理由につ

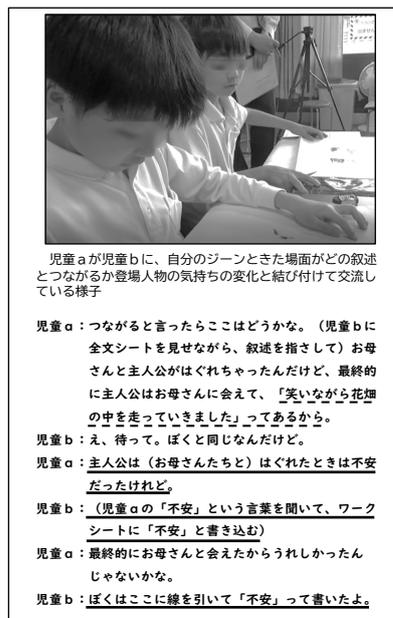


指導者B:心にジーンときた理由がはっきりできていないんだよな。Aさん同じところ選んでいるから交流しよう。  
 指導者A:いいよ。(二人で空席へ移動し、机をくっつける)  
 指導者B:(叙述を指さして)じゃあAさんが「これで最後だからね」がジーンときた理由について教えてくれる。  
 指導者A:うん。(叙述を指さして)主人公は鍵を見つけたとき不思議な気持ちに(省略)

図8 交流のモデル動画の会話の様子

いて伝え合いながら考えを深める様子が見られた(図9)。交流のモデル動画を視聴したことで質問の仕方や答え方を理解することにつながり、児童aは言葉について着目したことについて叙述を指さしながら伝えることができたと考える(図9の点線)。また、この発言を受け、児童bは交流を通して、考えを深めることができ、自分自身の中で曖昧だった登場人物の気持ちの変化を「不安」という言葉を使って具体的に想像することにつながった(図9の実線)。

このように、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を具体的に想定し、想定した姿の実現に向けた指導の手立ての一つとして、交流のモデル動画を活用したことで、児童は、文学的な文章を読むときに、一人一人がゾーンときた場面について言葉に着目して捉えることができるようになり、登場人物の気持ちの変化について場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができるようになった。このことにより、児童が言葉への自覚を高めることにつながった。



児童aが児童bに、自分のゾーンときた場面がどの叙述とつながるか登場人物の気持ちの変化と結び付けて交流している様子

児童a：つながると言ったらここはどうか。(児童bに全文シートを見せながら、叙述を指さして)お母さんと主人公はぐれちゃったんだけど、最終的に主人公はお母さんに会えて、「笑いながら花畑の中を走っていきました」ってあるから。

児童b：え、待って。ぼくと同じなんだけど。

児童a：主人公は(お母さんたち)はぐれたときは不安だっただけ。

児童b：(児童aの「不安」という言葉を聞いて、ワークシートに「不安」と書き込む)

児童a：最終的にお母さんと会えたからうれしかったんじゃないかな。

児童b：ぼくはここに線を引いて「不安」って書いたよ。

図9 児童aと児童bの発言の様子(点線と実線は筆者)

## 2 児童が自ら進んで学習に取り組み、学びを実感できる授業の実際

### (1) Z校の実態と課題

Z校では昨年度、校内研究に取り組む中で、児童が互いに聞き合える集団づくりを行うことや、指導者が児童の学びの環境を整えることで、児童が主体的に学習を進めることができるという成果が見られた。一方で、児童が自ら学習を進めていくことができるよう単元構想を工夫することや、児童が学びを実感するための効果的な指導の手立てを講じることについて課題が残った。そこで、令和6年度の校内研究主題として「学びを実感し、『学ぶ力』を高める子どもの育成～単元を通じた授業づくりと学びを支える学習環境の充実～」を設定し、学校全体で取り組むこととして、児童が学習のゴールに向け、主体的に学習に取り組むことができる授業づくりを挙げた。

### (2) 児童にとって魅力的な言語活動の設定

Z校の指導者Cは、図10の「読み解く力」の視点を踏まえた単元構想を基に、実践を行った。

指導者Cはこれまでの国語科の実践において、児童が「取り組んでみたい」「できるようになりたい」と感じ、興味・関心をもつことのできる言語活動となるよう工夫することに課題があったと振り返った。また、児童が学習のゴールに向けて自ら進んで学習に取り組む場面を設定した単元構想を行うことができていると感じていた。これらのことから、児童が自ら進んで学習に取り組むことができるように、児童の思いを授業に生かす工夫を行いたいと考えていた。そこで、単元構想を行う際、目的意識や相手意識を明確にして、児童が「取り組んでみたい」「できるようになりたい」と感じることができる魅力的な言語活動を設定することで、児童が自ら進んで学習に取り組むことができるのではないかと考えた。

指導者Cは、本単元において、調べたことを新聞という形式でまとめて書くという言語活動を設定する際、単元目標(図10のA)と関連付け、児童が相手や目的を意識できるようにした(図10のB)。また、1枚の新聞を四、五人のグループで作成するとしたことで、児童一人一人が書く内容を選び、集めた材料を比較したり分類したりして、グループ内で新聞記事に書くことを分担し、自分が一番

国語科単元構想シート		単元名「Z校のみよく伝える新聞を作ろう！」 全10時間	
教材名「新聞を作ろう (光村図書 4年上)」			
単元目標	○比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の活用方法を理解し使うことができる。	知識・技能	評価規準
①相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)ア	②書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつつたり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができる。	①「書くこと」において、相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にしている。(B(1)ア)	主体的に学習に取り組む態度
言語活動	自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿	②「書くこと」において、書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつつたり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えている。(B(1)イ)	進んで、相手や目的を意識して、経験したことなどから書くことを選び、伝えたいことを明確にし、見直しをもつてZ校の魅力を伝える新聞を作ろうとしている。
Z校の魅力を伝えるために、情報を収集・整理して記事を書き、X校の4年生が読みたくなる新聞をつくる。	・自分が一番伝えたいZ校の魅力を伝えるために、学校生活を想起しながら魅力を書いている。 ・Z校の魅力について同じグループの友達と交流しながら一番伝えたい内容を選んでいる。		
単元の流れ	「読み解く力」の視点を踏まえた、児童の学ぶ姿	指導の手立て	★児童が主体となるための重点的な手立て
①指導者が作成した新聞を見て、新聞の内容や特徴を捉え、学習の見通しをもつ。	必要情報を確かに取り出す【①発見・蓄積】	★言語活動を「Z校の魅力を伝える新聞」にすることで、児童が、目的意識や相手意識を明確にできるようにする。	・教室内に新聞コーナーを設け、様々な種類の新聞を置くことで、児童が新聞に興味をもつことができるようにする。
②グループごとに新聞のテーマや内容を話し合う。	指導者のモデルや実際の新聞から、見出しや記事、図、絵、写真など、読み手にわかりやすく伝えるための工夫を見つけている。	★グループで新聞の作成を行う中で、記事や見出しについてグループの友達と話し合いながら学習を進められるようにする。	・1人1台端末を用いて情報を収集したり、作業内容をグループで共有したりできるようにする。
③新聞の制作過程とアンケートの取り方を学ぶ。	情報を比較し、関連付けて整理する【②分析・整理】	★振り返りの際は、学習課題をどの程度達成できたかを児童が自覚できるように振り返りの視点を示し、次の学習につなげられるようにする。	
④～⑦グループごとに学習計画を立て、学習する。 ・記事を書くための情報を集める。 ・割り付けを考え、相手にわかりやすく伝える記事を書く。	収集した情報を、伝えたいことに合わせて取捨選択し、記事に書く情報を選んでいる。		
⑧読みたくなる記事の見出しを考える。	自分なりに解決し、知識を再構築する【③再構築】		
⑨グループで記事を読み直し、X校の4年生が読みたくなるような文章になるように話し合い、記事を加筆・修正する。	記事の内容を基にして、読者が読みたくなる記事の見出しを考えている。		
⑩学習を振り返る。 作成した新聞をX校へ送り、感想をもらう。	グループ交流を通して、見出しに用いる言葉を見直し、よりよいものになっている。		

図10 第4学年「書くこと」の「国語科単元構想シート」

伝えたいことを明確にすることができるようにした。さらに、指導者Cは、自分自身の出身校の魅力を紹介した新聞を言語活動のモデルとして作成し、児童に提示した(図11)。児童は、言語活動のモデルの新聞を読むことで、新聞でZ校の魅力を伝えることができる実感し、「新聞を書いてみたい」という意欲をもつことができ、学校の魅力を紹介する相手を宿泊体験と一緒に活動するX校としたことで、児童が新聞を書く意欲がさらに高まった。また、モデルの学校とZ校を比較することで、違いに気付き、Z校の魅力について改めて考えるきっかけとなった。その後の学習では、他の学校にはないZ校だけの魅力はないかという視点で話し合うことができた。児童の振り返りには「Z校の魅力がたくさん見つかったから早く新聞に書いてみたい」「X校の人に知らせたい。X校のことも気になる」という記述が見られた。



図11 指導者が示した言語活動のモデルの一部(枠とコメントは筆者)

児童が「取り組んでみたい」「できるようになりたい」と感じるような言語活動を設定し、言語活動のモデルを作成するとともに、言語活動を単元目標と関連付けるためにグループで1枚の新聞を作成するとしたことで、児童は新聞をつくることへの興味・関心をもつことにつながり、児童にとって魅力的な言語活動になった。

(3) 児童が見通しをもつことができる学習計画(図10のC)

指導者Cは、児童が新聞づくりに意欲をもったことを生かし、グループの目的に応じて児童が学習活動を選んだり、組み合わせたりしながら学習計画を立てることで、自ら進んで学習に取り組むことができるのではないかと考えた。そこで、指導者Cは言語活動のモデルとともに、新聞の制作

過程の例(図12)を提示し、児童が見通しをもって、学習計画を立てることができるようにした。児童cのグループでは、全員で取材を行ってから記事を書く担当を決めると計画したことに対して、児童dのグループでは、記事を書く担当を決めてから取材を始めようと計画するなど、グループごとに学習計画を立てることができた(図13)。

1	2	3	4	5	6
記事を書く	下書きを書く、仕上げ	記事の下書きをする	わり付けを考える	インタビュー・取材をする	だれが何を書くか決める

図12 指導者Cが児童に示した制作過程の一部

児童cのグループ			児童dのグループ		
1/10	7/9	3/8	1/10	2/9	3/8
完成しよう	新聞の作り方を下書きを半分	取材しよう	だれが何をやるか	記事の下書きをする	だれが何をやるか

図13 児童が立てた学習計画の一部(枠線は筆者)

児童の振り返りには「下書きが完成しなかったので次の授業では完成するようにしたい」「今日は自分の記事を書けたので次の授業では友達の記事にアドバイスをしたい」という記述が見られ、児童は自ら学習を調整し、学習のゴールに向けて、粘り強く取り組むことができている様子が見え、このことから、指導者が提示した制作過程から自分たちのグループに必要な学習活動を選び組み合わせることで、児童が「今日は何をするのか」「次はどうしたらよいのか」といった学習の見通しをもちながら学習計画を立て、自ら進んで学習に取り組むことができるようになった。

#### (4) 児童が学びを実感することができる振り返り

指導者Cは、振り返りを行う際、児童が学んだことを具体的に記述することに難しさを感じていた。そこで「学びの足あとシート」(図4)を活用し、振り返りの時間を十分に確保して、一人一人の振り返りを蓄積することに取り組んだ。このことにより、児童は継続して自らを見つめ直し、成長や課題に気付くことができるのではないかと考えた。まず、「できたこと」「分かったこと」について記述するよう振り返りの視点を示したことで、児童の記述が具体的になった。そこで、蓄積した振り返りから自らを見つめ直し、成長や課題について記述するよう児童に伝えた。

B	A
<p>昨日の活動をして本当に良かったです。これまでの学習が本時の学習につながったことを実感することができている。</p>	<p>なぜ仲良くなったのかを調べます」と自分の課題を設定して次の学習に向かっていることが分かる。</p>

図14 児童eの振り返りの一部(枠線は筆者)

2学期の「友情のかべ新聞」(光村図書4年下)の実践における振り返りを見ると、児童eは、単元の導入の振り返りでは、「ピースを書くのは楽しみです」と学習への興味をもち、「なぜ仲良くなったのかを調べます」と自分の課題を設定して次の学習に向かっていることが分かる(図14のA)。その後、自らの課題の解決に向けて毎時間学習を進め、単元の後半では、「ヒントをつなげて文章が書けた」「自信をもってミステリーパズルが書けた」と自らの成長に気付くことができ、前時までの学習で友達と考えを交流したことにより「昨日の活動をして本当に良かったです」と、これまでの学習が本時の学習につながったことを実感することができている(図14のB)。振り返りを1枚のシートにまとめ、振り返りの蓄積を行ったことで、児童は継続して自らを見つめ直すことができ、成長や課題に気付いてその後の学習に生かすことができた。

このように、児童にとって魅力的な言語活動を設定し、児童が興味・関心をもつことや、見通しをもつことができるように学習計画を工夫することにより、児童は自ら進んで学習に取り組めるようになった。また、児童が継続して自らを見つめ直すことができるように、振り返りを蓄積できる指導の手立てを講じたことで、児童は自らの成長や課題に気付いたり、その後の学習に生かしたりできるようになった。このことは児童が「分かった」「できた」と学びを実感している姿であると考えられる。

### 3 児童が主体となる小学校国語科の授業づくりを進めるための組織的な取組の実際

本研究では、1学期に派遣研究説明会、夏季休業中に派遣研究協議会を実施し、「児童が主体となる小学校国語科の授業づくりの実現」に向けて、単元構想や指導の手立てについて研究協力校の指導者と共通理解を図り、自校の実践に生かすための研究協議を行った。また、校内研究会に係る授業づくりや研究協議に協働して取り組むことで授業改善に向けた組織的な取組を行うことができた。

2学期には、Z校の第4学年で実践する授業について、「国語科単元構想シート」をY校でも共有し、Y校の第4学年で先行して実践に取り組んだ。その結果、両校の指導者は、各校での実践を基に児童が交流に取り組む時間の確保等について新たな授業改善の視点を得ることができた。第2回派遣研究協議会の際には、Y校の研究協力員がZ校の、Z校の研究協力員がY校の授業をそれぞれ参観し、研究協議に参加した。その後のトータルアドバイザーの講義を受け、協議会で学んだことをそれぞれの学校で共有し、協議会以降の実践に生かすことができた。このことが児童が主体となる小学校国語科の授業づくりの推進・充実につながった。

### 4 研究協力校の児童と指導者の変容

#### (1) 児童の変容

研究始期と終期に研究協力校の第3学年から第6学年の児童を対象とした児童質問紙調査を実施した。調査の結果を比較すると、「国語の授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分で取り組んでいますか」という設問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的な回答を示した児童の割合が77%から84%に増加した(図15)。また、単元後の振り返りや、質問紙調査の自由記述を見ると、児童は学習を通して「分かった」「できた」と自らの学びを実感している様子がうかがえた(図16)。

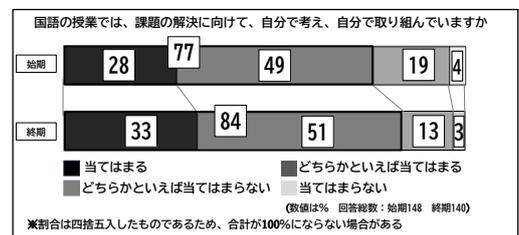


図15 児童質問紙調査の結果の比較

- 文章を書くとき、読む人の気持ちになって書くことができるようになった。(第3学年)
- はじめは(学習のゴールに向かうために)どのように学習するか分からなかったけれど、友達に助けをもらって学習の進め方が分かり、できるようになった。(第4学年)
- 本を読むと人の生き方などが分かるから、もっと本を読みたいと思うようになった。本を読んで学んだことを自分にも生かしたいと思うようになった。(第5学年)

図16 児童の振り返りや自由記述の一部

#### (2) 指導者の変容

研究始期と終期に研究協力校の指導者を対象とした指導者質問紙調査を実施した。調査の結果を比較すると、「児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができる」という設問に対し「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」という肯定的な回答をした指導者の割合が40%から58%に増加した(図17)。また、指導者の所感を見ると、「子どもたちの『やりたい』を引き出せるようになった」「魅力的な言語活動を設定することができるようになってきた」とあるように、指導者が授業改善の成果を実感していることが分かる(図18の下線)。これらのことから、児童が主体となる小学校国語科の授業を実現するためには、児童にとって魅力的な言語活動を設定することや、交流のモデル動画等を効果的に活用することなど、児童が思いや考えを深めるための指導の手立てを講じ、継続して授業改善に取り組むことが必要だと実感していることが分かった。

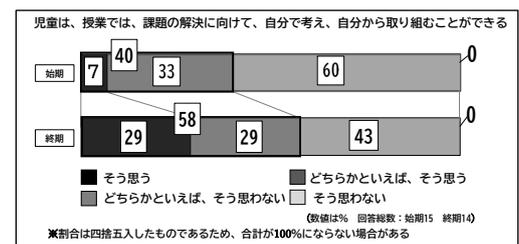


図17 指導者質問紙調査の結果の比較

- 場の設定を工夫すれば、指導者が考える以上に子どもは話せると感じた。
- 子どもたちの『やりたい』を引き出せるようになった。
- 魅力的な言語活動を設定することができるようになってきた。
- 言語活動や交流のモデルを示すことで指導者も子どもも先を見通すことができると感じた。
- 今年度だけでなく、次の学年にもつなげたい。
- 6年間を通して学年に応じた交流の進め方をしていかななくてはいけないと思った。
- 学習の中で並行読書材を活用するためには、読書活動の積み重ねが必要だと感じた。

図18 指導者の所感(下線は筆者)

一方で「今年度だけでなく、次の学年にもつなげたい」「6年間を通して学年に応じた交流の進め方をしていかななくてはならないと思った」「学習の中で並行読書材を活用するためには、読書活動の積み重ねが必要だと感じた」という声があった。指導者は低学年から高学年まで発達段階に応じた指導の手立てを継続することや、読書活動を充実することについて取り組む必要があると感じていることが分かった。

## Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

- (1) 指導者が、児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせることができるように、児童にとって魅力的な言語活動を設定することや、交流のモデル動画を効果的に活用することなど指導の手立てを講じ、継続して授業改善に取り組んだことで、児童は学びを実感することができた。このことが児童が主体となる小学校国語科の授業の実現につながった。
- (2) 指導者は、自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を想定し、想定した児童の姿を実現するための単元構想を行い、実践に取り組むことで児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、思いや考えを深めるための指導の手立てを充実することができた。その結果、児童は言葉に着目して考え、言葉への自覚を高めることができた。

### 2 今後の課題

- (1) 児童が主体となる小学校国語科の授業を定着するためには、低学年から継続して、児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせ、学びを実感できる授業に取り組む必要がある。
- (2) 児童が自ら進んで言葉による見方・考え方をさらに働かせるためには、読書活動の充実を通して自分なりのものの見方や考え方を形成し、言語感覚の育成を図る必要がある。

## 文 献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編」、平成30年(2018年)  
滋賀県教育委員会「第Ⅲ期学ぶ力向上滋賀プラン」、令和6年(2024年)  
水戸部修治『国語授業の「個別最適な学び」と「協働的な学び」』、明治図書出版、令和5年(2023年)  
水戸部修治『「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する国語授業モデル』、明治図書出版、令和6年(2024年)  
滋賀県総合教育センター「学びに向かう力の育成を目指す小学校国語科の授業づくり」、令和6年(2024年)  
滋賀県総合教育センター「小学校国語科における『確かな学力』の向上を目指す、『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」、令和5年(2023年)  
滋賀県総合教育センター「目的に応じて『読むこと』および『書くこと』の資質・能力を育成する小学校国語科の授業づくり」、令和2年(2020年)

トータルアドバイザー 京都女子大学発達教育学部教授	水戸部修治
研究協力校 米原市立柏原小学校 彦根市立若葉小学校	
研究協力員 米原市立柏原小学校 彦根市立若葉小学校	中澤愛莉朱 樋本 俊